

中国ブロック・活動研究会への参加報告

「2025 年度中国ブロック・ユネスコ活動研究会 in 倉敷」は 11 月 8 日倉敷市芸文館に於いて開催されました。大会のテーマは「ユネスコの視点から若者と考えるまちづくりの未来」でした。

倉敷には、大原美術館、倉敷市立美術館など名の知れた美術館や博物館が数多くあります。駅から中央通りを南下していくと、角地に小ぢんまりした公園のような広場のようなところがあり、座ってコンビニで買ったパンを食べていると、ご年配の方や小さいお子さんを連れのお母さんなど近辺にお住まいの方々が訪れて、憩いの場にもなっていました。そういえば、周りに柵のような仕切りもなく皆さんが気軽に出入りできるよう工夫されており、夜に通ってみるとライトアップされていて、なるほどと思いました。

さて、研究会のオープニングは子ども備中神楽です。1992 年に道場が開かれ、3 歳から 70 歳までの会員で構成された神楽団です。中でも園児と小学生 6 名が演じた演目「猿田彦の命」は参加者の目をくぎ付けにしました。日本の地域ごとに伝統芸能が存在し、それぞれが特色を持ち、新しい発見があるものですから興味深く拝見させていただきました。

開会式では、この研究会が若者の視点を踏まえて、学び合い繋がっていく取組みの契機となるよう期待していること、大原総一郎氏が提唱された「下流は上流のために、上流は下流のために」といった思想を盛り込んだ 15 項目からなる高梁川流域連盟趣意書のお話などがありました。

続いて、中国ブロック ESD 活動顕彰です。これは全国で中国ブロックだけが行っているものです。山陰海岸ジオパークを生かした取組みで小学生、地域、大学生が協力しながら色々な切り口で自然学習を行っている鳥取県の小学校の事例、ハマナスの日本西限自生地（大田市）での地道なハマナスの保全活動をしている島根県の小学校の事例、戦争に敵味方なく国同士の垣根を超えた活動に尽力された森 重昭氏（爆心地から約 400 メートル離れた中国憲兵隊司令部で死去した米国搭乗員たちの遺族に連絡して情報提供をした研究者）との交流を原点に運営されるロンサムレディ号平和祈念館の山口県の事例は、広島平和記念資料館の職員が森 重昭氏を取り次がせていただいた経緯があるそうです。

広島県の事例として「まなびの島」をモットーに身近なイベントや起業準備まで多くのプロジェクト生み出し、図書館やカフェを拠点とした居場所創りしていると紹介されましたが、どこの地域でも高齢社会の現状があり、この島の人口の半分近くが 65 歳以上だそうです。

岡山県の事例は、ユネスコ提唱の「HUIL」の視点から、世代を超えての官民連携を実践し未来ビジョンまで見据えた取組みとユネスコスクール高等学校ネットワークで大学の伴走支援を得ながらの交流会を行っている活動の 2 事例でした。どの取組みも若い人たちへの継承であったり、若い人たちの自主的な活動であったり、若い人たちの関わりがポイントとなっていました。

引き続き、日本ユネスコ国内委員会と日本ユネスコ協会連盟の方々から報告

同連盟青年評議員による発表です。その後、次年度開催地あいさつと続き、倉吉ユネスコ協会の方から、自然・文化・信仰が織りなす地域遺産の価値について再発見する学びと交流の場としますとのことで、大会への参加をPRされました。

そして、メインのパネルディスカッションです。同時進行でユースセッションを分科会を3つに分けて行っており、そのセッションのファシリテーターである大学生 3 名の報告から始まりました。「私のまちの宝物とまちづくりのアプローチから生まれるもの」ということで、大まかに、まちの何が魅力か、何が課題であるか地域だけが知っていることもあるので、人とのつながりが大切であり、自分事として考える意味で、自ら火付け役となるべくイベント実施やボランティア活動をやっていくことなどの話から、彼らの提案には前向きさを感じました。

引き続き、パネリストの発表で「HULのアプローチから生まれるもの」と題し、高校生1名と大学生2名によるものでした。ひとつは「くらしきになる」「くらし気になる」「倉敷になる」を絡めたエリアプラットホームの話だったと思いますが、この組織は、2023年6月に設立した官民連携組織で、会議や勉強会を数多くこなして、未来ビジョンまで掲げておられます。

そのビジョンの2では「観光とまちづくり」が共存するまちとあり、特にぴったりだと思いました。やはり、都市化の波が訪れ、外部資本店舗との間に距離感があったり、空き家問題もあったりするわけで、地道な取組みが避けられません。矢掛のまちづくりでは、地域資源である古民家のリノベーションで分散型ホテルに供するなど、観光客が地元住民になるような雰囲気醸成が醸し出されているとの報告がありました。

ここでも新しいものと古いもののバランスが課題であるご指摘がありました。「備中と道」という「備中の文化、歴史を掘り起こしつなげていこうそれが人と人とのつながりになる」の話に至っては、パネリストが熱弁され、取組みを愛して恋して行こうと訴え、そこに道があるだけでなく、60年前に失われたものに価値を見つけ、歴史・文化・ひとのつながりを想い、世界平和への道にもつながるのではないかとのお話でした。

後は、コメンテーターのコメントとディスカッション、コーディネーター総評、締めは倉敷ユネスコ協会ユース会員からのメッセージで閉会となりました。将来を担う若い人たちと人生の先輩たちが語らう場は、ほのぼのとして貴重な場となりました。そして、倉敷ユネスコ協会の皆様が中国ブロック・活動研究会開催という大きな目標ある中で、この半年の活動の間に会員数を17名から41名に増やされたことに称賛を込めたいと思いました。

＜研究会参加者＞ 藤井正一 松岡盛人 高田幸子 森木学 平井勇



倉敷の夜景
とある広場の
ライトアップ

パネルディスカッション
壇上を埋める若い方々



オープニング
「備中神楽」